



特定非営利活動法人

アジア・アフリカと共に歩む会

南アフリカ共和国貧困地域への教育支援

TAAAの活動日誌 2016年

- ・ 2016-11-29 [生徒たちが教え合うパソコン教育](#)
- ・ 2016-10-24 [地域住民のための有機農業塾“MOATS”](#)
- ・ 2016-09-21 [「ブックボックス」大活躍！](#)
- ・ 2016-09-07 [読書文化が育ってきた](#)
- ・ 2016-07-31 [有機農業塾を拠点とする農村作り](#)
- ・ 2016-06-22 [浦和学院高校の生徒さんと作業](#)
- ・ 2016-06-16 [6月4日TAAA講演会レポート②](#)
- ・ 2016-06-10 [6月4日TAAA講演会レポート①](#)
- ・ 2016-05-20 [小4の壁を乗り越えよう！](#)
- ・ 2016-04-18 [ムプランガ州保育園に絵本を届けました](#)
- ・ 2016-03-13 [図書イベントを開催しました](#)
- ・ 2016-02-17 [JICA菜園事業が終了しました](#)
- ・ 2016-01-18 [生徒が育つ図書室作り](#)

2016-11-29 南アフリカ

生徒たちが教え合うパソコン教育



2016年3月に始まった外務省NGO連携無償資金協力事業「ウムズンベ自治区の学生の経済・社会参加に向けた学力向上と基礎技能習得」では、英語教育だけでなく、高校生対象に基礎的なIT教育を行っています。高校10校の図書室にノートパソコンとプリンターを1セットを設置し、現地パソコン指導員が巡回指導をしています。

南アフリカの社会では、仕事だけでなく生活の様々な場で簡単なパソコン操作技術が必要とされています。求職や進学申請書にも、手書きではなくタイピングされた履歴書が求められます。対象地域のような遠隔地の若者たちは、家にも学校でもパソコンに触れる機会がないため、就職や進学において、申請時点で不利な立場に立たされます。ここをなんとかクリアして進学や就職ができた優秀な若者も、パソコン基礎技術の不足によって、職場や学校で、都心部の若者と比べて、大

きな遅れをとってしまっています。

また、対象地域は、テレビや新聞の普及率が低いため、都心部の若者との著しい情報格差があります。学校に1台パソコンを導入するだけで、高校生の情報量は飛躍的に増えます。

パソコン指導員のクラニさんは地元出身の若者で、ここの生徒達が社会に出たときのハンディを熟知しているため、日々精力的に指導をしています。1校につきパソコン1台では限界はありますが、紙にキーボードを描いてタイピングの練習をさせたり、先に指導を受けた生徒たちが他の生徒を指導するなど工夫しながら進めています。

事業終了後は、パソコン指導員がいなくても、自分たちの力でパソコン教育を続けていけるようにしなければなりません。資金、人材、管理体制、スペースなどあらゆる面でキャパシティが乏しい対象校では、パソコン教育を図書活動の一環として組み込み、図書室で図書委員会生徒たちが中心に行っていくことが、無理なく続けていける形ではないかと考えています。このために、今クラニさんは、司書教師と図書委員会生徒たちが他の生徒に指導できるレベルになるまで、彼らの操作技術と指導力を磨くことに注力してくれています。

(久我)

2016-10-24 南アフリカ

地域住民のための有機農業塾“MOATS”



7月15日にJICA草の根技術協力事業「有機農業塾を拠点とする農村作り」が始まり、TAAAの支援対象校であるムタルメ小学校の敷地内に有機農業塾ができました。塾の英語名は“MTHWALUME (ムタルメ) ORGANIC AGRICULTURAL TRAINING SCHOOL”で、“MOATS(モアッツ)”の愛称で地域に知れ渡りようになってきました。農業指導員は、知識と経験のあるシニアファシリテーターのムファナ、先行事業で農業指導員だったボングムーサ、農業塾のすぐ近くに住む地元の若者ムコリシに決まり、3人が協力してコースの内容や期間の決定、マニュアル作成等の準備をしました。

農業塾の生徒募集用にフライヤーを作成し、指導員たちが地域の病院や学校を回って張り出したり、手渡しをした結果、第1回コースには、27名の若者が登録しました。

最近、地域の若者の間で「自分たちの手で何かを始めなければならない」という意識が高まってきていることに加えて、先行事業で地域内の学校ベースに有機農業を指導した結果、生徒家庭に野菜作りが普及したことが、積極的な参加につながったのだと考えています。

27名中男性は9名と圧倒的に女性の参加が多いのですが、「菜園はおばあちゃんの仕事。男がやるものではない」といった偏見がいまだに残っているこの地域で、若い男性が有機農業を将来の仕事としてとらえて真剣に勉強し、活動している姿はとても頼もしい！男性メンバーの1人は、先行の学校菜園事業で菜園委員会メンバーとして活動していた卒業生でした。卒業後に進学も就職もで

きず、有機農業を仕事にしたいと考えていたところに“MOATS”の話を聞いたとのこと。

コースが進むうちに、授業で学んだことを家庭で実践し始め、家庭菜園を始めた生徒も出てきました。また、ある女性メンバーは「畑作りをしながら収穫物を利用したケータリングがしたい」という将来の夢を語り始めました。協同組合設立の計画を始めるグループも出てきました。

9月は春で植樹の時期だったので、実践授業としてバナナの木を10本植えました。木が育ってバナナがたわわに実る頃、MOATSの第一回コース生たちは、MOATSで学んだことを生かして、彼ら自身の畑から、日々の生活から、どのような収穫を得ているのでしょうか。今からとても楽しみです。



(平林、久我編集)

Page Top ▲

2016-09-21 南アフリカ

「ブックボックス」大活躍！



現地で8年間も活動し学校図書活動の基盤を作ってくれた移動図書館車「イテンバ号（希望号）」が、とうとうリタイアする時期にさしかかっています。今まで、故障につぐ故障にも負けずに、なんとか修理を重ねてがんばってもらいました。リタイア後は、適切な場所で、固定図書館として活躍してもらうことを計画しています。

代わりに登場したの「ブックボックス」です。学校のレベルや需要に合わせた本をクリアボックスに容れて、一定期間各校に貸し出して、対象校間を巡回していきます。ただ貸し出すだけではなく、返却時には、本を借りた生徒からブックレビューを提出してもらうことを義務づけています。読解力だけではなく、書く力も養っていくのが狙いです。ブックレビューは、低学年は文字よりも絵が中心のカードですが、高学年となると、レポート用紙数枚にしっかりとしたあらすじや感想文を書いてもらいます。今年度から本格的に始めましたが、驚くことに、レビューの提出率はほぼ100%です。これは、移動図書館車による長年の巡回貸し出しにより、いかに彼らが図書に慣れ親しみ読書習慣が身についたかを物語っていると思います。この基盤があったからこそ、すんなりと移動図書館からブックボックスへと貸し出し方法を移行できたのです。

ブックボックスは、学校図書室の一角に置かれ、各校の蔵書不足を補っています。学校図書室の貸し出し記録とは別に、ブックボックス専用の貸し出しノートがあり、TAAAの図書スタッフは返却時にチェックします。「今度はどんな本が来るのかな」定期的に入れ替わるブックボックスは、大人気になりました。

支援方法としてのブックボックスの魅力は何でしょうか。それは低コストで簡素なので、現地の人たちが「これなら自分たちでもできる」と思ってもらえること。教育省図書部門担当者に紹介し

たところ、「これは、お金がかからないいいアイデアだ」と感心してくれました。

移動図書館車からブックボックスへの移行は、対象地域におけるTAAAの現地の関わり方の移行ともいえるでしょう。現地の人たちが自分たちの力でコストをかけずに創意工夫でできるやり方を、彼らと一緒に考えていく。そういう協力が、これからの私たちの役割になっていくのだと思います。ここを焦らずにしっかりやっていきたいと思います。

(久我)

2016-09-07 南アフリカ

読書文化が育ってきた



猛暑の日本から逃げるように、8月20日から28日まで、南アフリカへ視察訪問に行ってきました。今回の訪問で実感したことは、学校の図書活動が根付き、それに伴って、確実に読書習慣が根付いてきていることです。対象学区全般において「学校図書室を拠点に読書文化が着実に育ってきた」といっても言い過ぎではないでしょう。

対象校間で、図書活動に対する理解とサポート、司書教師の熱意や力量に差があり、図書活動が遅れ気味の学校もありますが、すくなくともどの学校も「学校に図書室や図書コーナーがあって、本はいつでも手に取ることができる」状態になりました。まだまだ蔵書も図書環境も不十分ですが、TAAAが対象地域に入る数年前の「本といえば教科書だけで、読書のための本が一冊もない状態」からは大きな進展といえるでしょう。

2013年から支援を始めたカンヤ高校をアポなしで訪問しました。昨年、高校卒業試験の合格率を前年から21%も引き上げた高校です。

コンテナ図書室を訪問すると、3名の生徒が黙々と読書をしていました。図書委員会の生徒たちです。「彼らは休み時間になるといつも図書室にきて、本を読んでいるの」と図書担当の先生は「いつも」を強調しました。私の突然の訪問にも気づかないほど集中ぶりです。こういう本の虫の生徒たちや勉強に参考書が必要な生徒たちのために、この学校は土日にも校長先生がきて、図書室を利用したい生徒たちに鍵を渡しているそうです。

ゲームもテレビもない地域です。あれこれと楽しいことがありすぎて、読書だけに集中してられない都市部の生徒たちよりも、ここの読書好きな生徒たちの方が読書量が多いかもしれません。

私がそう思っていると「やさしい英語の本が少ないことが悩みの種です。優秀な生徒たちはどんどん自分で難しい本を読んでいる。でも、読解力に遅れのある生徒たちは、図書室に来ません。彼らが読書好きになるように、小学生用の易しい英語の本がほしいです」と先生にいわれました。こういう生徒思いのすばらしい図書担当教師がいるからこそ、この地域で着実に読書文化が育っているのだな、と改めて思いました。あとで、TAAA図書スタッフから、この図書担当教師も「い

つも」コンテナ図書室にいることを知りました。

(久我)

2016-07-31南アフリカ

有機農業塾を拠点とする農村作り



7月18日に、JICA草の根技術協力事業「有機農業塾を拠点とする農村作り」が実質的に始まりました。この日は故マンデラ氏の誕生日で、南アでは彼が67年かけて自由を勝ち取ったことから「67分何らかのボランティアをしよう」という呼びかけがありました。私たちはちょうど事業地であるムタルメ小学校を訪問したので、敷地内のゴミ拾いを行いました。こうして新規事業は、「名誉ある67分ボランティア」でキックオフとなりました。

2016年1月に終了した先行事業「学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域作り」では、地域の環境に合った有機農業を学校菜園を中心に促進してきました。その結果、学校菜園活動は定着し、生徒のなかには家庭菜園を始める子供や、卒業後に就農を目指す若者が育ち、彼らが牽引役となって、学校から地域へと有機農業を普及してくれました。

しかし、基礎技術をしっかり学んだ生徒たちを将来の有機農業リーダーとして育成していくためには、学校を拠点とした指導には限界がでてきました。長い休暇期間には学校が閉鎖されるため、彼らを指導することができませんし、学校のある日も指導をする時間はどうしても制約されます。

また菜園をより広く地域社会に普及して地域の食糧自給率を上げるためには、活動拠点を学校から、地域に開かれた「学びの場」に移し、様々な年齢層の住民への指導が必要になってきました。

2年9ヶ月間の現行事業「有機農業塾を拠点とする農村作り」では、対象校の一つであるムタルメ小学校の敷地内に有機農業塾を設立（使われなくなった教室を改装）し、そこを拠点に生徒や保護者を含めた幅広い年齢層の住民を育てながら農村作りを目指していきます。学校の休暇中は、いくつかの学校から学ぶ意欲の高い生徒たちが集まって、本格的な技術指導を受けられるようにします。また、家庭菜園を始めたい住民のグループには、農業塾から指導者を派遣して指導を行っていきます。皆様からの暖かいご支援、ご協力をどうぞよろしくお願い致します。

(平林、編集：久我)

浦和学院高校の生徒さんと作業



TAAA事務局の野田千香子です。

昨日は、浦和学院高校から大勢の生徒さんがボランティアで手伝いに来てくださると、安達先生からご連絡御受けていました。

TAAAは成立してから24年、かつて若かった私たちも1年1年、当たり前のことですが、歳を重ねていきます。きょう、見える生徒さんは高校3年生。TAAAが南アに英語の本を送り始めた時から数年経って生まれた方ばかりです。

TAAAの中でも大きい人と思っていた丸岡さんも小柄に見えるくらい、背も体格も立派な男女9人の方々が正確に10時に入って来られ、作業場はいっぱいにりました。丸岡さんから作業の手順を説明してもらい、さっそく仕事に掛かっていただく。数人の生徒さんには交代で隣の部屋で、「ぐりとぐら」の絵本に現地語（ズールー）のラベル貼を西村さんの指導で行なっていただきました。

柔道部から見た体力のある生徒さんには、隣の倉庫から、山のような段ボールを作業場へ運び込む仕事をお願いしました。「柔道部の練習よりきついなあ」・・・

皆さんがせっせと働いてくださり、昼近くには、新段ボールが底をついてしまった。作業場の半分くらいを天井近くまで高々と積まれた輸送用ラベルを貼り終えた段ボールの山を背景に記念撮影。

南アに住んで現地の活動のコーディネーターをしている平林薫さんが一時帰国していて作業に参加。最後の10分間、平林さんを囲んで南アの特徴や現地の学校の図書活動についてお話を聞きました。

午前の作業に参加したTAAAスタッフは、丸岡、大友、野田、浅見、西村。午後はTAAAの総会。参加者は、久我、浅見、丸岡、大友、平林、野田、高野、茂住。

浦和学院高校の皆さん、ありがとうございました。

(野田)

6月4日T A A A 講演会レポート②



休憩の後は、JICA 青年海外協力隊として南アフリカに渡り、ムプマランガ州の保育園にT A A Aの絵本を寄贈して下さった三浦さんにご挨拶をいただきました。スライドも数枚用意していただき、ご自身の南アでの活動と、絵本を手にして喜ぶ子どもたちの写真をみせてくださいました。

第二部は図書支援についてです。現在は43校を対象としており、3月まではボランティア貯金に支援いただいて活動を展開し、それ以降は外務省の日本NGO連携無償資金協力で現在も実施中です。

従来、移動図書館車をフル活用してきましたが、だいぶ古くなってきたため故障がちであり、修理しながらの運営は限界に近付いています。また、学校側も移動図書館車だけだとそれに依存がちとなってしまいます。したがって、移動図書館車による活動は3月末でいったん終了し、4月からは学校への本の寄贈と図書指導に力を入れています。

日本で集められた英語の本は、商船三井さんの支援で毎年1回南アフリカへおくれます。前回は昨年10月に届き、おかげさまで特に高校生向けの本はだいぶ充実してきました。しかしながら、小学生向けの本が不足しており、今後も比較的易しい英語の本を増やしていきたいと考えています。現地では、小学校4年生までズルー語で授業をしていますが、シニアプライマリーの5~7年生は英語になるため、ちょうどこの学年の本が求められています。

また、今年の新しい取り組みとして、10校のセカンダリースクールを対象に、ラップトップPCを1台ずつ配付し、IT支援を行っています。先生による生徒への授業の内容としては、PCの基本的な使い方、マイクロソフトのWord、Excelの使用法、インターネットなどになります。生徒1人1人にPCを配付する余裕はありませんが、私たちの支援としては、物をあげれば良いということではなく、1つのモデルや仕組みを提供することで、あとは現地で実行・横展開できることをねらっています。

なお、スポーツ支援については、できる範囲でサッカーボールの提供を行っています。体育の授業がないので、生徒たちは休み時間や放課後に生き生きとサッカーを楽しんでいます。これは、菜園支援による給食の提供と同様、生徒たちが学校へ通うモチベーションにもなっているため、今後も継続していきたいと考えています。

質疑応答も含めて3時間すべて南アフリカづくしの時間となりました。ご来場くださった皆様、ありがとうございました。今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

(丸岡晶)

6月4日TAAA講演会レポート①



6月4日（土）13:30～16:30、さいたま市の武蔵浦和コミュニティセンターにて、TAAA講演会が開催されました。今回は平林薫・南アフリカ事務所代表が「南アフリカの現状と学校・コミュニティ支援の状況について」というタイトルで、多数のスライドや写真を用いて講演いたしました。

最初に浅見会長から、TAAAの事業が近年でもっとも充実している旨の挨拶があった後、第一部は平林さんから菜園支援に関して話が進められました。

TAAAの事業は、クワズルーナタール州ウグ郡ムタルメ・トゥートン学区の小学校～高校の40校で展開されています。この地域は失業率が50%以上と高く、学校・地域で技術習得の機会が少ない状況です。また、困窮家庭が多いことから十分な食事をとれていない生徒が多く、歴史的背景から農業が活発ではありません。

このような状況の中、TAAAは「ウグ郡内に有機農業が定着・発展することで地域が活性化され、住民が地域内で自活できるようにする」という上位目標をかかげ、プロジェクト目標、各種指標に落とし込み、菜園支援活動を展開してまいりました。

その結果、アウトプットとしては以下6つを出すことができています。

1. 対象校における菜園委員会の設立
2. 対象校から保護者家庭への有機菜園活動普及の基盤作り
3. 有機菜園活動普及へ向けた人材育成
4. 卒業生グループと学校・地域との協力体制 確立とメンバーの経験・スキルの向上
5. 学校間のネットワーク構築
6. 事業対象者とカウンターパートの協力体制確立

これらの事業を通じて、持続性の観点から対象地域には有機農業が最適であることがわかりました。有機農業は食糧保障となり、自分の手で育てた作物を食べる喜びにもつながっています。また、菜園委員会という仕組み・システムづくりをすること、学校教育の一環として農業を指導すること、できるだけ早い時期に身につけて継続することがポイントであると整理できました。

（丸岡晶）

小4の壁を乗り越えよう！



南アフリカでは、小学校4年から全ての教科の授業が英語で行われます。このため低学年のうちに英語の基礎力が身についてないと、その後の学力の積み重ねができなくなってしまいます。「小4の壁」問題です。

母語が英語でなく日常において英語を使うことのない地方の子供たちへは、この小4の壁を乗り越えるために、本来ならば特別なバイリンガル教育が施されてしかるべきです。

しかし、私たちの対象学区のように、予算不足のなか、特別支援はおろか、教材も英語教師も不足している環境下では、多くの生徒たちが、英語の基礎力がないまま小4に進み、その後の授業についていけない状況におちいつています。

日常会話が英語の都市部の生徒たちとの低学年での英語力格差は、その後の著しい学力格差につながります。そして、学力格差は、将来の希望格差、収入格差につながっていきます。

この状況を少しでも改善していくため、今年は、株式会社三井住友銀行様よりボランティア基金をいただき、低学年を対象とした「南アの子供たちの読書力を育むための学校図書支援活動」を5つの小学校で行っています。

基金により、学校にスペースがないため図書室を作れずに長年困り果てていたエシバニニ・ジュニアプライマリ(写真右)に、コンテナ図書室を寄贈することができました。また、絵本や低学年用の小説を5校に配布することができました。

図書環境改善だけでなく、小さいうちから読書習慣と英語力を育むために、TAAA図書スタッフや教師が本の読み聞かせをしたり、音読会をするなど、彼らが本とお友だちになる様々な活動を行っています。

各校で図書クラブも設立しました。今後は、高学年が低学年に本の読み聞かせをするなど、TAAAスタッフや教師の監督の下で、生徒どうしが教え合ったり励まし合える活動も始めていきます。

みんなで小4の壁を乗り越えてほしい、そのためには先ずは本とお友だちになってほしいと願っています。

(久我)

ムプマランガ州保育園に絵本を届けました



この度、青年海外協力隊として南アフリカ共和国ムプマランガ州に派遣されていた三浦良祐さんから依頼があり、ムプマランガ州の小さな保育園に英語の絵本を郵送しました。三浦さんからご報告をいただきましたので、ご紹介いたします。

この度は突然のお願いであったにも関わらず、快く多くの本をご寄贈いただき誠にありがとうございました。お送りいただいた英語の絵本37冊を本日Hungani crecheという保育施設の子供たちに無事届けることができました。絵本に馴染みがない子供たちでしたが、皆興味深々に絵本を広げていました。

英語を習いたてのため、読解力がおぼつかないところもありますが、絵本を使って読み聞かせをできるようになったと、職員の方々も大変喜んでいます。本当はこの本がどれだけ活用されるか追って報告をしたいと考えていましたが、任期の都合で間もなく日本に帰国するため十分なモニタリングができないことをお許しください。

帰国した際には皆さまの活動について詳しいお話しをお聞かせいただけたらと存じます。また、南アフリカ共和国の地方の実情を知っている身として何かお力になればと考えています。簡単ではございますが、これを報告とさせていただきます。

寄付依頼者：三浦 良祐（青年海外協力隊 平成25年度4次隊 南アフリカ共和国派遣）

2014年4月より南アフリカ共和国に派遣され、現地NGOのThe WDB (Womens Development Businesses) Trustに配属。Mpumalanga（ムプマランガ）州のAcornhoek(アーコンフック)にあるオフィスを活動の拠点として、ITエンジニアとして現地業務をサポート。配属先のNGOでは貧困地域のコミュニティー支援を行うZenzeleプログラムを実施しており、住居、生活インフラ、家庭問題、教育支援など多岐にわたる課題を現地関係者と連携しながら解決している。(WDB website: <http://wdbinvestments.co.za/>)

寄贈先：Hungani Creche（フンガーニクレッチ）

Mpumalanga（ムプマランガ）州のCottondale(コテンデール)という村にある保育園で、3歳から6歳の子供が預けられています。Cottondaleをはじめこの地域一帯には本屋がなく、周囲の学校にももちろん図書室はありません。WDBスタッフの一人がこの施設がある村で活動を行っており、昨年に園長先生と共に子供たち向けの図書室を作りたいと相談があり、南アフリカ協力隊員のOBより紹介いただいたTAAA野田様に本の寄贈をお願いした次第です。

寄贈日：2016年3月10日

図書イベントを開催



3月末に終了する国際ボランティア貯金寄附金配分事業「基礎教育支援のための学校図書室の配備と巡回指導」の一年間の集大成として、公共ホールで大きな図書イベントを開催しました。約100名の出席があり、各対象校生徒の発表は、詩や朗読、読書感想など様々で本当に素晴らしかったです。ドラマ仕立てで日頃の図書活動の成果を発表する学校もありました。

ゲストスピーカーである州教育省図書情報部門(ELITS)のシズウェ・ンベレ氏はスピーチの中で、「日本の学校には必ず図書室があり、読書習慣をきっちりとつけることで教育の基礎ができ、それが国作りにつながっている。南ア政府も予算の問題があるとはいえ、何とかしてすべての学校に図書室を設置しなければならない」という話がありました。

また、TAAAがこの地域の学校への支援を継続して行っていることに対して、「アフリカでは泥で家を建てるが、人々が力を合わせて少しずつ泥を塗って築き上げる。TAAAの活動は、私たちの家作りのために一緒に泥を塗ってくれているようなものだ」という印象的なスピーチ、「TAAAのサポーターの皆さんに、いただいた本は学校で有効に利用されており、皆感謝の気持ちでいっぱいです、と伝えてください」というメッセージをいただきました。

対象校の図書委員会の活動や移動図書館の利用状況など総合的に判断して小学校トップ5校、中高校トップ3校を選び、イベントの最後に表彰式を行いました。中高校の部1位はコンテナ図書室を寄贈したカンヤ高校です。活動開始当初は、図書室の存在意義を理解しておらず、寄贈したコンテナ図書室の本棚にいらなくなった古い教科書を積み重ねて倉庫状態にするなど、「どうなることやら」という場面も多々あったカンヤ高校でしたが、今では笑い話になっています。

指導や研修を通して、司書教師も図書委員会生徒たちも大きく成長し他校の見本になるほど、しっかりした図書運営を行うまでになっています。コンテナ図書室は、放課後や休日も開放され、卒業試験を控えた12年生や地域住民にも利用されるようになりました。

イベント会場の準備から開催まで図書スタッフ2名と菜園スタッフのボングムーサにヘルプを頼んで4人で行い、当日の司会はボングムーサにお願いしました。彼は「やったことないけど・・・がんばってみます」と言い、結果的には完璧な司会をこなしました。

本当に、地元の若い人たちの能力の高さに改めて感嘆しています。

(プロジェクトマネージャー 平林)

JICA菜園事業が終了しました



2013年8月に開始したJICA草の根技術協力事業（草の根パートナー型）「学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域作り」は2016年1月末に終了いたしました。対象地域を2つの学区（ムタルメ学区とトゥートン学区）に限定し、2学区内の62校のうち、小学校から高校までの40校を対象校とし、学校以外にも学区内の4つのコミュニティー菜園グループも指導してきました。

対象地域を限定したことから、訪問指導の頻度が高くなり、密度の濃い指導を行うことができ、教師、生徒、コミュニティーメンバーとの強い信頼関係を築くことができました。

対象校40校には、菜園委員会を作り、引き継ぎを含めた活動システムを確立し、学校菜園活動が継続し根付いていくための運営基盤を整えました。全対象校生徒18,100人のうち2,060人の生徒が菜園活動に参加しました。そのうち448人の生徒が家庭菜園を始め、212人の保護者が学校菜園を手伝いなかで有機農業を学んでいきました。

食糧自給率が低く子供たちが必要な栄養が取れていない地域で、微力ながら学校を拠点に生徒や保護者を通じて有機農業を普及できたことを嬉しく思っています。生徒たちは、菜園委員会活動を通して、有機栽培の技術や知識だけでなく、帳簿付け、管理、協調性、リーダーシップなど、本当に多くのことを学び取っていきました。

事業終了前に、対象校の校長や教師にアンケートやインタビューを行ったところ、以下のような多様なコメントがあり、改めて学校菜園事業が、学校や生徒達、そして地域に様々なインパクトを与えていたことが分かりました。

- ・菜園活動により家庭で食糧確保ができるようになったため、町に引っ越した家族が戻ってきて生徒数が増加した。（山岳部、過疎地域の小学校）
- ・菜園プロジェクトは学校全体を蘇らせてくれた。（事業当初、学校運営に問題があり、荒廃がみられた高校）
- ・普段教室内では勉強が遅れがちな生徒が、熱心に菜園活動を行う姿が見られた。
- ・中学生で素行が良くなかった生徒が、菜園活動に取り組むようになってから生活態度が変わり、家庭菜園も始めた。
- ・生徒が畑作りに“愛情”を持つようになった。
- ・困窮家庭の生徒に新鮮な野菜を持たせられるようになったのは大きな成果である。
- ・給食材料が不足した時に畑の収穫物を使って本当に助かった。
- ・収穫を販売して学校のファンドレイジングとなった。
- ・生徒が責任感や自主性を身につけた。
- ・菜園委員会の生徒は自分たちで時間や役割を決め自立して活動を行い、乾期には率先して川へ水汲みに行き菜園を支えた。
- ・菜園事業で学んだ生徒たちが将来農業を専攻し、地域住民に教えるリーダーになってほしい。
- ・家庭菜園を始めた生徒のなかには、すでに地域住民に作物を販売している生徒もいる。
- ・自分の手で食糧を作り出すことの喜びや意義を学んだ。

- ・ 菜園委員会メンバーは、地域住民に収穫物を販売し、会計作業をすることで、農業がビジネスになることを学んだ。
- ・ 安全で栄養価の高い収穫物は地域住民に喜ばれている。
- ・ 農業科学専攻の生徒の成績が良くなった。

JICA事業は終了しましたが、TAAAは、菜園事業対象校へは引き続き図書活動支援を継続して行っていきますので、今後とも菜園活動の進捗を確認しフォローしてまいります。

(平林、編集：久我)

Page Top ▲

2016-01-18 南アフリカ

生徒が育つ図書室作り



TAAAが支援している学校の図書室は、どこもアレンジが個性的で手作りのぬくもりが感じられます。それは、先生と生徒達が「ああでもない。こうでもない」と試行錯誤して作り上げていくものだからです。長いこと図書室がなかったハラバ小学校も、先生の指導のもと、生徒たちが、初期の段階から図書室作りに参加しました。分類した本をせっせと本棚に並べ、カラフルな啓蒙ポスターも壁にかけて、自慢の図書室ができました。

図書室完成後には、保護者も招待しての図書室のオフィシャルオープニング式典が開催されたそうです。

こうして、図書室を作り上げる段階から、生徒達が積極的に関わると、図書に関する興味、本を大切にする気持ち、そして皆で学校をよくしていこうという心が育まれます。

今年もTAAAは「生徒が主役」をモットーに、彼らが積極的に関わることで成長していくプロジェクトを目指していきます。引き続き、皆さまの暖かいご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

(久我)

Page Top ▲